

A-1.下鼻甲介粘膜表層焼灼術とA-2.下鼻甲介粘膜下層凝固術はアレルギー性鼻炎の主要変部位である下鼻甲介を焼灼し、粘膜の縮小と変調を図ることでアレルギー反応を抑えようとするのが目的です。この手術は耳鼻咽喉科では外来手術として安全に行うことができるため、近年普及してきた治療法です。手術には表4に示すような各種レーザー、高周波電気凝固機器、ラジオ波凝固治療機器、化学的粘膜焼灼剤などが用いられます。

表4 下鼻甲介手術に使用される治療機器

各種レーザー
 (炭酸ガス、半導体、Nd:YAG、KTP)
 電気凝固機器
 (高周波電気、アルゴンプラズマ、ラジオ波凝固装置)
 超音波振動メス (ハーモニックスカルペル)
 粘膜切除機器 (マイクロデブリッター)
 化学焼灼剤 (80%トリクロール酢酸)

アレルギー性鼻炎に対する外来日帰り手術として、最も普及しているのがレーザーによる下鼻甲介粘膜焼灼術です。レーザー手術の適応に関して、表5にまとめました。

表5 下鼻甲介粘膜レーザー焼灼術の適応

アレルギー性鼻炎、花粉症、肥厚性鼻炎、点鼻薬性鼻炎、慢性鼻炎などの疾患を有し、

- ・薬物による一般的な保存的治療では、症状の軽快がみられない難治症例。
- ・鼻閉症状を有す中等症以上で、ステロイドや血管収縮性点鼻薬を連用する症例。
- ・通院治療を継続することができず、薬を規則正しく使用できない症例。
- ・薬の治療が制限される妊婦や妊娠希望者、ほかに疾患があって薬の使用を控えたい症例。
- ・薬で眼気やだるくなるなどの副作用が出る、あるいは薬を嫌悪する症例。
- ・年中、鼻水や鼻づまりがひどいため、薬のみ続けていないといけな小児。

レーザー治療の長所と短所

長所としては、1.治療効果が7～9割以上と高い、2.治療効果が比較的長く続く、3.入院が不要で手術時間も短くて済み、通院回数も少ない、4.出血がほとんどなく、縫合や抜糸も不要、5.薬や放射線のような副作用がなく、薬の使用量も減らすことができ、強い薬に頼らなくても済むようになる、6.健康保険が適用され費用の負担が少ない、などがあげられます。短所としては、術後数日間の鼻水や鼻づまりです。またレーザー治療の効果は永続的なものではありません。よく誤解されているのですが、アレルギー性鼻炎に対する手術的治療も根治的治療つまり「アレルギーを治す治療法」ではありません。薬にしても、手術にしても「つらいと感じている症状を改善するあるいは和らげる」のが目的です。レーザーやラジオ波凝固治療により焼灼した粘膜は粘膜細胞が減少してボリュームが少なくなりますから鼻づまりが軽減します。アレルギー反応を起こす細胞も少なくなりますから、鼻水も少なくなります。鼻粘膜は次第にもとの状態に戻るため、1～2年後には鼻炎の症状が再発してきますが、そのような場合でも安全にくり返しレーザー治療を行うことができますので、再治療により容易に症状の改善は得られることとなります。

おわりに

現在、花粉症に対してさまざまな治療法が開発され、必要に応じてそれらを組み合わせるにより、花粉大量飛散期においても大きな苦しみはなく、日常生活を送ることができるようになってきました。しかし、薬物の効果と副作用には個人差が大きいために、薬物療法でも鼻閉などの症状が残るような場合に、耳鼻咽喉科ではレーザー治療などの外来日帰り手術も普及しています。